

ニジェール支所便り

2016年3月号

【編集長】小林支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

今月のトピック



- 支所からのひとこと（小林支所長）
- EPT 原専門家 離任にあたっての一言
- 2月の支所の活動紹介
 - 帰国研修員同窓会 ANASJ 会員総会の開催
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
 - みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)
 - 第4回・誰でもわかるみんなの学校モデル解説 ～質のミニマムパッケージ～
- ニジェール国内の出来事
 - ニジェール国政選挙のあれこれ、ただいま選挙真っ只中

支所からのひとこと

ニジェールに来てから数知れず口にした言葉の一つに「ハルマッタン」があります。サハラ砂漠から吹く貿易季節風のことで、アラビア語由来の響きからもわかるとおり、アラブ交易時代から人口に膾炙し、西アフリカの生活の中に溶け込んでいる存在です。東アフリカでは同じくハムシーン(あるいはカムシーン)と呼ばれて、インド洋岸沿いに南北に吹くため、アラビア半島と東アフリカ地域を往復する帆船の重要な推進力を担っていました。季節によってなぜ南北に風向きが変わるのか。これは太陽熱によって黄道(太陽の通り道)上では常に上昇気流が存在し、その結果として地表付近では黄道に向かう風が発生することによります。地球の公転により、黄道の位置は北回帰線と南回帰線の間を往復しますので、この区域では季節により風向きが変わるという仕組み。

これから夏至に近づくにつれ、黄道がニジェール国土を横切り北上していく時期、ハルマッタンは吹き止み、上昇気流が発生する地帯に入ります。そして、ギニア湾の水蒸気を含んだ南風が吹くのは更にその後。ハルマッタンによりサハラから運ばれて降り積もった砂塵とギニア湾のからの雨が出合い緑が生まれるのには、もう少しの時間を要するのです。

(支所長 小林 知樹)



2月の支所の活動紹介 帰国研修員同窓会 ANASJ 会員総会の開催



開会のスピーチをする小林支所長

去る2月13日、土曜日の朝にANASJの会員総会が開催されました。今回は、大統領選挙キャンペーン中ということもあり、これまでよりも少数ではありましたが、それでも128人が一堂に会しました。中には、つい先月帰国したばかりのフレッシュな参加者の顔も見られ、終始和やかな雰囲気の中で総会が執り行われました。

冒頭のニジェール支所長のスピーチでは、JOCVの派遣が中断し、JICAニジェールの活動も縮小していく中で、日本とニジェールの絆を維持していく役割を是非ANASJの皆さんに担って欲しい、また日本で得た様々な知識や経験を、ニジェール社会に適した形で還元して欲しいという期待が伝えられました。

またANASJの現会長からは、まず始めに、これまで日本の様々な地域で、教育分野だけでなく、環境、保健、農業などあらゆる分野の研修に多くのニジェール人が参加し、有意義な経験を得ていることに対し、JICAへの謝辞が述べられました。そして、この貴重な人的リソースを集結することでANASJをよりダイナミックなものにできるとし、それを実現するためには、会員一人一人が多くのパートナーや財源を確保する努力が必要である、など現実的且つ建設的な意向が述べられました。

毎年この時期に実施される会員総会では、会長と実行委員メンバーが投票選挙によって選出されます。来年度2016年のANASJ会長として選出されたのは、今年度に引き続きラキア・アシルさん。2012年から会長職を担うベテランで、やる気も十分です(支所便り11月号でも一度紹介させていただきました)。また実行委員会のメンバーも、2名の新顔が加わり、新しい風を吹き込んでくれそうです。

今年度の活動計画では、教育分野のみならず環境分野、保健分野の活動(5S-KAIZEN)も盛り込まれています。このダイナミックな実行委員会のメンバーによって、できるだけ多くの会員を巻き込みつつ、来年度の活動を盛り上げて欲しいと思います。



最後は皆でハイチーズ!

(企画調査員 佐々木夕子)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

教育グローバルパートナーシップ資金により、質のミニマムパッケージ(算数ドリル)ティラベリ州全3500校(生徒35万人)に普及へ

その大逆転は、2016年1月18日に世銀の会議室で起こりました。この会議室で行われた会議の結果、質のミニマムパッケージ¹(算数ドリル)がGPE²資金により、ティラベリ州全3500校に普及されることがほぼ決定したのです。実現すれば、実に35

¹ 質のミニマムパッケージについては、『誰でもわかるみんなの学校モデル』ご参照ください。

万人の生徒に算数ドリルが配られ、ベースラインとエンドラインで算数の学力テストの正答率 50%改善というこのモデルの恩恵にあずかることになります。予算規模は日本円で約 3 億円に上ります。

その会議室で行われていた会議は、GPE(教育のためのグローバルパートナーシップ)資金で実施されている世銀管理の PAEQ(教育の質改善支援プロジェクト)のモニタリング及び今後の活動に関するものでした。参加者は、GPE の評価ミッション及びニジェール在住ドナー、教育省次官、主要局長、CGDES 調整部長などで、TV 会議システムで USAID 本部のニジェール担当も参加していました。議題は、フランス語圏アフリカ諸国の初等教育の共通学力テストである PASEC 2015 年の結果に示されるようなニジェールの生徒の基礎学力の低さへの対策でした。この議題は、PAEQ の中でこれらの対策を早急に実施すべきと考える世銀担当者の強いイニシアチブによって選定されたものでした。会議では、現在ニジェールの生徒の基礎学力の向上に直接・短期的に資すると想定されるみんなの学校の「質のミニмумパッケージ」(算数)と小学校低学年の識字(読み方速習)分野における 2 つプロジェクトがそれぞれプレゼンを行い、その後、どのようにこれらの活動を普及していくかが話し合われました。この話し合いの結果が、上記の快挙に繋がったのです。

この会議がなぜ大逆転の機会だったかと言うと、GPE 基金で活動が実施される場合、教育省の年間活動計画に登録されなければならず、みんなの学校の質のミニмумパッケージについては、2016 年度の教育省の活動として認知されておらず、その会議が行われる時点までは、活動計画に登録される可能性はまったくなかったからです。しかし、この活動は、2 月 19 日に締め切られ、2016 年度活動計画に登録され、GPE ミッションの結論として aide-mémoire(覚書)に質のミニмумパッケージのティラベリ州への拡大が明記されているだけに実現の可能性は高くなっています。

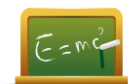
みんなの学校プロジェクトは、2004 年の開始以来、早い時点からニジェールの生徒の基礎学力の低さに危機感を抱いていました。また住民、保護者の生徒基礎学力の改善に高いニーズがあることもわかっていました。これらのことが、第 3 フェーズでの質のミニмумパッケージ(算数)の開発につながっています。ミニмумパッケージの開発は、算数ドリルの開発という非常に多くの日常的な作業を伴っており、プロジェクトにとって多大な時間と努力が必要でした。しかし、実証を行い、そこで大きな成果を得るようになり、そこからこのパッケージ普及のための教育省へのさまざまな機会を使った働きかけが始まったのです。しかし、残念ながら、教育省の反応は鈍いものでした。それは、第 2 フェーズ終盤の教育省幹部の交代が関係していたためか、初等教育の質の低さが危機的状況にあるのに、それをわかっていてもわからないふり、あるいは、無視しているとしか思えないような対応でした。生徒が基礎的な学力を付けないまま、学校で学ぶべきことを学ばないまま学校を去っていく状況は、上述の PASEC の結果を待つまでもなく、少しでも現場を知っていればわかることです。逆に、質のミニмумパッケージには、学力テストの実施とその結果の住民との共有という活動があり、否が応でも、生徒の学力が住民にわかってしまうことが、このモデルへの消極的な反応に繋がっていたのかもしれませんが。

こういった状況で、プロジェクトでは、ドナー、特に中心的ドナーである世銀と AFD フランスへのこのモデルの成果の情報共有や普及への働きかけを強化するようになりました。特に世銀とは、基礎モデルの全国普及や、補助金有効モデルの普及で協力しており、強い信頼関係がありました。この信頼関係に世銀を含むドナーへの強い働きかけ、それから、当然、教育省の働きかけも功を奏し、このような快挙に結びつきました。今後、JICA に求められていることは、この世銀のイニシアチブに答え、この普及の実施促進支援とその実施成果の評価支援です。この普及が成功し、成果が上がり、それが国際的に認められた評価手法で評価されれば、今後のニジェールへのモデル全国普及に繋がるだけでなく、同じような基礎教育に課題のある国へのモデルや算数ドリルの活用に繋がり、基礎学力レベルの改善への一助になることは間違いありません。

² Global Partnership for Education の略。

第4回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説

～質のミニマムパッケージ～



この稿では、“みんなの学校にはいろいろなモデルがあるが、区別がつかないし、内容もわからない。”という声に答えるべく、みんなの学校のモデルを説明しています。興味のある方は是非一読ください。第4回目は、住民参加より質の改善を目指したモデル「質のミニマムパッケージ」の登場です。

前回のおさらい

現在のみんなの学校の活動計画方法は、教育の質を保証する要素を学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）と規定し、要素毎に、それぞれの学校の状況を分析して、その学校で、教育の質を保証するのに欠けていたり、不足していたりするものを見つけ、不足や欠如の部分进行補い、埋める活動を探していくものです。この計画策定方法をベースとして、住民の支援による活動と補助金による活動を組み合わせることにより、質の改善へのシナジーを目指したのが、前回ご説明した「学校補助金を有効に使い学習の質を改善するための計画方法」でした。補助金有効利用モデルの効果は JICA 研究所によるインパクト評価により科学的に証明されました。

質の改善計画モデル開発のきっかけ

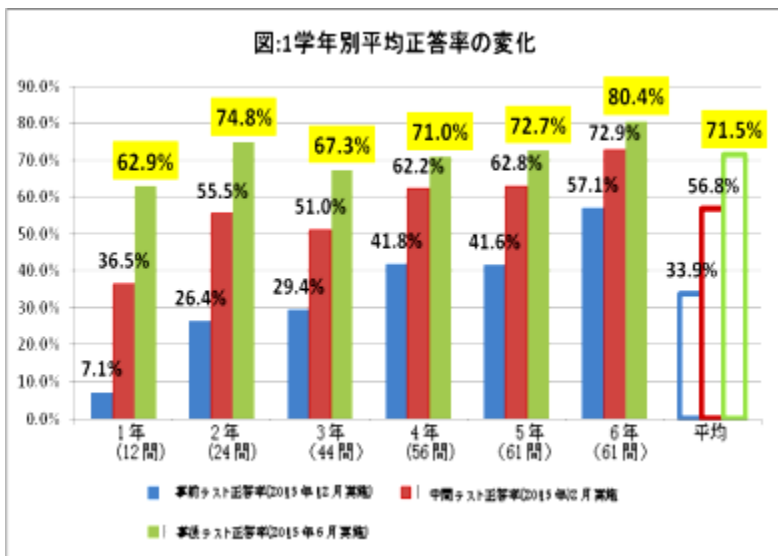
確かにインパクト評価の結果は、賞賛されるべきものでしたが、学力の向上の度合いは、プロジェクトが期待するほどではありませんでした。もともと、算数やフランス語の実力がとても低い生徒が多いニジェールの教育現場です。もっと効率のいい方法がなければ、彼らの識字や計算能力を上げることはできません。そこでプロジェクトは「学習の質を改善するための計画方法」で活動を選択し、補助金を使って活動を実施しても、なぜ期待したほど成果がでないかを分析しました。その結果、それまでのやり方では、質を規定する3つの要素、学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）の内、学習時間と学習環境は改善できたものの、教授の質（教員の質）の改善が不十分だということがわかりました。教授を改善する方法と問えば、通常教員の質改善という答えが返ってきますし、カリキュラムや教科書の内容を改善しつつ、教員養成校の教授の質を改善するなどの方法で、教授の質を上げるというのが、ニジェールの教育開発計画の内容でもあります。正論です。しかし、現実には、教育省の改革の恩恵が隔々までいきわたり、ニジェールの学校の教授の質が改善できるのは、現在の計画の進捗から判断して、きつとずっと先のことです。つまり現在も将来も、ニジェールの小学校では、大多数の子どもたちが学校に入っても読み書き計算ができないまま学校を離れていくということなのです。プロジェクトでは、改めて、教授の質（教員の質）問題に向かい合わなければならないことになりました。この限界を超えることができるのか、ここから、みんなの学校の新しいモデル作りの挑戦が始まりました。

教員なしで、質の高い教育を実施する方法＝質のミニマムパッケージ

プロジェクトが挑戦したのは、「教員がいなくても、あるいは質の低い教員でも、質の高い教育を実現する方法」です。こんなことを書くと、そんなことができる訳がないと、みなさんに怒られそうですが、教え方を知らず、モチベーションも高くない教員が多いニジェールの教育現場を見ていると、こういう方法でないと、落ちこぼれていく何十万という生徒に手を差し伸べることができないと思うようになりました。しかし、

教育の質の改善が議論される時、絶対にはずせないと考えられている教員という要素を回避して、生徒に直接アプローチし、本当にその学力を上げることができるのか。

プロジェクトは答えを探しました。行きついた結果が、質のミニマムパッケージだったのです。このパッケージは、学力テストの実施とその結果の共有（学校の質に関する情報共有）、住民に支援された補習の実施（学習時間の増加）、順序だった反復による自得も可能な算数ドリルと補習ファシリテーターの導入（学習環境の改善及び、教授の質の改善）からなっています。つまり、それまでのみんなの学校モデルの弱点であった教授の質を、すぐれた自習教材とファシリテーターの研修の導入で補い、質の改善のための3要素をカバーし、生徒に学力をつけてもらうことを狙いました。



驚異的な成果

このモデルの実証は、何回か行いましたが、最後に行った対象 39 校、4000 人の生徒に対する試行では、図 1 の結果を出しました。四則計算にかかる学力テストにおいて、この質のミニマムパッケージ導入前の 2014 年 12 月から、中間時点の 2015 年 2 月、そして事後となる 2015 年 6 月では、全学年において大幅な正答率の上昇（全学年平均事前 33.9%→事後 71.5%）がみられました。特に、低学年（1、2 年）における正答率は、1 年生で 7.1%から 62.9%

（55.8%上昇）、2 年生で 26.4%から 74.8%（48.4%上昇）と驚くべき伸び率を示しました。この驚異的な改善は、一校あたり平均 250 時間に及び算数ドリル実施時間の確保に支えられています。

この結果は、質のミニマムパッケージが、質を保証するための 3 要素を満たし「質の高くない教員で、質の高い教育を実施する方法」の一つの例を見事に実証したと言えると思います。

モデル成功の理由

このモデルの成功には、2つの理由があります。一つ目は、学校の教授の質、生徒の学力を明らかにした学力テストの実施と、保護者との結果の共有です。保護者にとって、自分の子どもたちが通っている学校の質を知ることがとても難しいのが現実です。学校で行っている期末毎のテストは残念ながら、統一共通試験ではないので、学校のレベルも個々の生徒のレベルもわかりません。ニジェールには、客観的に生徒の学力を図る試験はこれまでありませんでした。この学力テストの実施と住民・保護者との結果の共有により、初めて学校の実際の教育の質、つまり、学べていない生徒が大多数を占めていることが明らかになったのです。この現実が明らかになったことで、それまで受験生が中心だった補習を低学年でも行わなければならないこと、補習も効率的に行う必要があることがわかり、算数ドリルの導入とその実施が住民、保護者、教員などの学校関係者の自発的な誓約事項となったのです。

2 番目の成功要因は、アフリカに合わせた優れた算数ドリルの開発です。日本には、すでに系統的かつステップで生徒が自習できるように作られた算数ドリルが存在していました。しかし、それらは日本の生徒向けに作られたもので、アフリカの学校で学ぶ生徒たちの状況に合わせたものではありませんでした。

プロジェクトでは、日本のリソースの協力を得てドリルを算数の基礎の基礎から作ってもらい、それをニジェールの生徒に実際に使ってもらいました。すると、日本の子どもにはわかっても、ニジェールの児童にとってわかりにくいところ、特有の弱点などが明らかになり、それらの点を日本側に伝えました。日本ではそれらの指摘をもとにドリルを改定するという作業を続けました。通算で2年間に及ぶこの気の遠くなるような作業を繰り返して完成したのが、現在の算数ドリルです。このドリルの効果は、その学力テストで証明されることとなります。

汎用性はあるのか

素晴らしい効果を残している質のミニマムパッケージですが、モデルに汎用性はあるのでしょうか。いままでの項での普遍的モデルの定義は、「普遍的モデルは普遍的ニーズに対し、すでにその効果が証明されている原則を適用化した改善策をもつ」というものです。これに対しこのモデルは、どう評価すべきでしょうか。ニーズに関しては、学習の質を改善することは、教育におけるすべての関係者にとっての普遍的なもので、定義に合っています。効果が証明されている原則の適用化についてはどうでしょう。パッケージの要素である学力の関係者との情報共有、補習による学習時間の増加の学力への効果はすでに証明されている原則で、プロジェクトはそれらの原則を現場にうまく適用しています。算数ドリルについても、類似自習ドリルによる効果は、広く日本でも認められており、その適用の完成度は実証の成果を見れば明らかです。この面でこのモデルに普遍性があると判断できると思います。

課題と挑戦


このモデルの普遍性について、プロジェクトは確信をもっていますが、モデルの普遍性と普及しやすさと持続性は別の問題だとも考えています。みんなの学校モデルの大きな強みは、モデル普及に費用と手間と時間がかからず、しかも効果が持続するという点です。典型的なのが最初のミニマムパッケージ（学校運営委員会活性化モデル）です。研修は短期間で一回だけ、研修対象者も限られています。継続的に最もお金のかかるモニタリング／支援も、学校運営委員会連合によって、行政官のモニタリング負担を軽減しています。その成果として、住民は現在に至るまで学校運営に関し参加動員を続け、その額は投入額をはるかに超えています。これだけ費用対効果が高く、持続的なモデルは学校運営改善の分野では他にありません。

今回紹介した上記の点で質のミニマムパッケージを評価すると、他のモデルに比べて普及しやすさと持続性ともに、最初のミニマムパッケージより明らかに劣っています。それは、質のミニマムパッケージが効果を発揮するためには算数ドリルというツールが必要だからです。住民がこれを購買しつづけるのには負担が大きすぎます。では政府が買ったらどうか。教科書も十分に配布できていない政府がこの副教材の購入にプライオリティを置く可能性は限りなく低いです。

では、このモデルは、普及もできず、持続性もないのか。答えは否です。上記の成果で見るような成果を生徒一人当たり1000円の投入で実現できるモデルです。教育開発に有効なモデルやツールに投資したいと考えている教育系のファンドは多くあり、このモデルの付加価値を高めれば、その資金を獲得できる可能性はあると考えています。

付加価値とはなにか。それは、もうひとつの大きな教育の基本的能力、つまり識字に関する取り組みをパッケージの中に導入することです。現場の基礎教育改善ニーズは、読み書きそろばんで、そろばんよりむしろ読み書きと書いていいと思います。読み書きそろばんを同時に改善して始めて、ニジェールの生徒たちは生

きる上で最低限の能力を身に着けたこととなります。そして、開発ファンドにとってもそれは魅力的なパッケージとなるのです。みんなの学校プロジェクトは、将来的に質のミニマムパッケージの改善を行い、普及することを目指すべきだと思います。

終わり 

(プロジェクト・チーフアドバイザー 原 雅裕)

ニジェール国内の出来事 ～ニジェール国政選挙のあれこれ、ただいま選挙真っ只中～

2月21日は大統領選挙及び議会選挙の投票日でした。ニジェール人じゃないけど、その数日前から「わくわくドキドキ気分」となり、やはり心はニジェール人でしょうか。

いやいやそれ以上のものがありました。選挙動向も去ることながら、もしや治安情勢が一変して、緊急退避を余儀なくされる...なんて考え込みバッグに荷物をまとめ、情報の収集、こちらの方が「わくわくドキドキ気分」となった原因かも知れません。ワタクシ以外にも、そのような高ぶった気持ちとなった人も多かろうと思います。



写真1, 2 選挙キャンペーン中のニアメの様子。



写真3 15名もの立候補者

さて、ニアメ市内が色とりどりの吹き流し(?)に飾られ、ニジェールの鯉のぼり??

いえいえ、政党カラーの吹き流しがあちらこちらに飾られ、まさに、約3週間に渡る選挙キャンペーンが賑やかに始まりました。一色なら見やすいが、二色ともなると、どの政党なのか...わかる人にはわかるようですが、15人の立候補者のポスター、Tシャツ等のグッズそれぞれにシンボルカラーがついている姿、みなさん想像してみてください、華やかですよ。

当地ミニ・ハルマタンが吹く季節、今にもはがれ落ちそうな吹き流しが多々、鮮やかとは言えない選挙合戦が色づく街角、ニアメです(写真1, 2)。

その開票結果を待ち浴びる国民、「なんだ、なんだ、いつもなら投票の翌日には結果が出るのに、今回はどうしたのか??」、「おいおい、CENI(選挙管理独立委員会)が八百長をやっているようじゃないの?」、「なんで人口 5,000 人しかない村に有権者が7,000 人もいるんだよ!」などなど、国民は結果を待ちきれず、彼らのイライラは頂点に差し掛かっていました。そして、投票から5日目、ついに発表された暫定投票結果は、予想通り現イスフ大統領が 48%と得票率が過半数を超えないにしても(超えていたかも知れないが、今回は到達しない方が良くと判断したのは、私を含む多くの国民の意見)、歴史的にも高水準の得票率により首位を固め、続いて、乳児売買の容疑で収監中の元首相で元国会議長... いろいろな肩書があり、顔面に伝統的な傷もある大物ハマ氏が得票率 17.4%で第 2 位となり、ニジェールの慣例ともいえる決選投票が行われることとなりました。

今次選挙においては、有権者数750万人とも言われ、うち200万人は初めて投票を行う有権者の新人さんです。何よりも、投票率が 67%を超えるという、当国始まって以来の大人気選挙となりました。政治離れの進む我が国日本と違い、国政に関心を持つニジェール人が多いというのは、国の発展に直結するのか、脱線するのか、またしても衝突するのか、大変予測が難しい限りではあります。国政に関心があって、今後成立する新政権に対して積極的な関与を国民が見せてくれればいいのですが、明日を生き抜くために必死になっている国民にとっては、目先の利益への直結が急務であり、そのためには右に行ったり左に行ったりと、ニジェールの抱える事実も透けて見えます。



写真 4 この二人の決選の行方は?

今も、選挙の真只中。この決選投票の結果がどう出るか、そして国民はその結果に対してどう向き合っていくのか、乞うご期待!!

(企画調査員 中川直人)